

まちとの深い“感応”の術を

「上町台地からまちを考える会」の誕生から

「上町台地」といっても、大阪に縁ある方以外でご存知の方は稀だろう。けれど、歴史地理を学んだ方ならご存知のはず。というのも、古代には四天王寺、難波の宮、中世には石山本願寺、近世には大坂城と、歴史を物語る数々のランドマークが、この台地上に存在しているからである。ちょうど、現在の大阪城を北の起点に、大阪市内中心部を南北に背骨のように貫く台地である。西には海が開け、古代日本の国際的な玄関口でもあった。もちろん、大きな歴史の物語だけでなく、それを支える市井の人々の歴史が嘗々と積み重ねられてもきた。

浄土信仰が盛んだった時代には、台地の上から極楽浄土を拝む、「日想観」の聖地として貴賤を問わず多くの人々が集まり、遠く西方に沈む夕陽に思いを馳せた土地でもある。また、海に向かって切り拓かれた平らなまち大阪で、唯一起伏のある場所だけに、変化に富んだ坂道と斜面林が織り成す風景を楽しめるのも、この台地ならではの特性である。近代化の波を経て後も、大阪の都心部にありながら、商業・業務施設一色に席捲されることなく、歴史、文化、国際交流、医療・福祉、教育、宗教・・・そして居住、経済効率一辺倒では成立し得ない、多様な営みとそれを支える資源に恵まれてきた地域でもある。

こうした背景と決して無縁ではないと思うのだが、上町台地一帯では、近年市民サイドから、注目すべきユニークな活動が次々に生まれ育ってきている。例えば、台地のエッジ直下、江戸時代以来数々の寺院が軒を連ねる寺町（天王寺区下寺町）の一角で、劇場型の本堂ホールや研修室、オープンスペース等を有し、アートを核にコモンズ（公共財）の再生に取り組む寺院、「應典院」とNPO「應典院寺町倶楽部」。また、下寺町一帯の寺院等が実行委員会を結成し、春の一日境内を会場に、いっせいに門戸を開いて開催する「なにわ人形芝居フェスティバル」も今では恒例の行事である。

上町台地上で、都心ながら戦災を免れ、大阪らしい商店街と長屋、そして路地が張りめぐらされた、懐かしい暮らしの風景が残る、空堀商店街界隈（中央区）では、明治・大正・昭和初期の民家を再生する「空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト（からほり倶楽部）」の活動が活発である。「からほり倶楽部」が手がけた、長屋再生複合ショップ「惣」や、屋敷再生複合ショップ「練」では、時を経た長屋や屋敷の価値の継承と、新・旧文化の融合を可能にする、内発型・持続型の地域ビジネスのありようが模索されている。さらに、長屋や路地の残るまちの魅力を、地域の人々に誇りに思ってもらいたいと、一昨年からアートイベント「からほりまちアート」を開催。まちなかの長屋や路地やお店をめぐりながら、

アート、クラフト、音楽、パフォーマンス等々、さまざまな表現を愉しめるイベントで、昨年は2日間で約1万人が来場。人々のまちへの意識を変える力に育ちつつある。

また、東へ少し足を伸ばすと、社会的マイノリティが誇りを持って生きていける社会づくり、人権教育に力を入れた活動を展開する「在日韓国民主人権協議会」の存在がある。在日コリアン自身が当事者として提供する歴史や文化の学びを経て、多文化共生への理解・共感を広げる体験プログラムは、修学旅行や研修のプログラムとして各地の学校等で採用され、全国のたくさんの若者たちとコリアタウンをつなぐ、チャンネルとなっている。多くの在日コリアンが暮らす、共生のまちだからこそ果たし得る貴重な取り組みである。

上町台地をめぐる数々の拠点の魅力を、広く発信していきたいと思い立った若者たちのグループもある。「上町台地活性化 NPO 西代官山クラブ」である。今年4月には、まちの歴史・文化スポットを回遊しながら、お店でお茶や食事や買い物も楽しめるようにと、「上町台地を遊ぼう！」マップを発行した。

こうした地域の歴史文化と密接に関わりながら、生まれてきた“市民の知”ともいえるべき活動資源を、上町台地という場所性に立脚しながら結び合わせていくことで、より力ある知へと育てていくことができるのではないか。そんな思いをもちより、上記の活動グループや、大学の研究者、地元有志などが集まって（筆者もその一人）、今年5月31日「上町台地からまちを考える会」が正式に発足した（代表：秋田光彦）。地域住民、NPO、大学、企業、行政等が、セクターを超えて協働し、市民の側から主体的に、まちと暮らしについて考え実践する場をつくっていかうという取り組みである。

まちにはマジョリティもいればマイノリティもいる、新住民もいれば旧住民もいる……。多様な生が交錯するまちとの深い応答関係の中でこそ、本来の公共性が育まれるのではないかという思いを出発点に、異なる価値が出会い、新たな価値を生み出していく、創造のプロセスをまちの中につくっていく取り組みともいえる。「資源力」「コミュニティ力」「市民力」三つの力を育てる、つながりのデザインが活動の目標である。

そこで、「上町台地からまちを考える会」では、今年度三つの事業に着手予定だ。一つは、まちの中に学びの場を再生し、地域資源を掘り起こしていく「上町台地・まちの学校」の試行。二つ目は、商業主義的な観光ツアーとは一線を画し、もうひとつの大阪を体感できる「上台地・アートツーリズム」の開発。三つ目が、「からほりまちアート」「ワンコリアフェスティバル」「コモンズフェスタ」等の固有の魅力あるイベントを結ぶ仕掛け「上町台地・アートマンスリー」である。「アートツーリズム」「アートマンスリー」の「アート」には、「まちとの深い“感応”の術」とでもいえるべき意味が込められている。その意味で、「お地蔵さん」や「お祭り」、「長屋」や「お寺」「神社」等々は、タフなアートである。もちろん、それと渡り合えるくらい、タフなコンテンポラリー・アートの登場にも期待したい。